
パパのいうことを聞きなさい！ IFストーリー

夢を忘れた者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パパのことを聞きなさい！ IFストーリー

【Zコード】

Z0827X

【作者名】

夢を忘れた者

【あらすじ】

大学に合格し、新生活をスタートさせたばかりの瀬川祐太と職業難のなか無事就職をした瀬川虎牙は、新しい友人や憧れの人、同僚に巡り会う。しかし祐太の姉夫婦が乗った飛行機が行方不明になつた事で事態は一変する。一人暮らしの祐太の部屋に中学生の空、小学生の美羽、保育園児のひなが同居することになってしまった。困つていると祐太の兄貴分である虎牙が手を差し延べる。思春期の女の子達のパパになってしまった祐太と虎牙の運命は…?ドキドキの同居生活に、祐太と虎牙を慕う少女達に憧れの先輩や同僚との恋も

絡んで大騒動！

ドタバタアットホームストーリー始まり始まり。

1話（前書き）

初文です。65%ぐらいは本から抜き出していますが気にせず読んでいただければ幸いです。
気になる方はバックして下さい。

そう、君達がいるから強くなれる。
どんな事があつても守つてみせる。
だつて俺達は、パパなんだから。

俺は瀬川虎牙。親戚の瀬川祐太とは兄弟の様に育つた。彼は、親戚から視てもすさまじい人生を送っている。例えば、物心ついてすぐ両親を亡くし、逞しくバイタリティ溢れる姉に育てられたという波乱に満ちたスタートを切つていた。そして今現在彼は大学に入学し安アパートに住み始めたハズだったが彼の狭い部屋には、中学生、小学生、幼稚園児という三人の女の子がいる。なぜ?と聞かれたら面倒くさい前置きが必要になってしまつ。まあ言えるのは、年頃の女の子はとにかくいろいろと難しい生き物であるということだ。そして、あろうことが俺達は、そんな難解な生き物のパパなのだ。そしてまた今日も波乱に満ちた一日が始まるのだった。

「・・・はダメー!」

朝っぱらから、安アパートの外に聞こえる小学生の悲鳴が響いた。
「朝っぱらから何してかした。祐太の奴は。」

俺はため息混じりに呟いているとさらに怒鳴り声が聞こえてきた。
どうせ困っているであろう弟分を助けるために彼の部屋に向かいドアをノックした。

「はい」

先程の小学生の声が聞こえ少ししてドアが開いた。そこから顔を覗かせているのは金髪で俺の胸の辺りまでしか身長のないツインテールの少女が出てきた。見た目はアイドルばりの美少女が俺を見上げて「いらっしゃい。虎牙叔父さん。」

と言つて出迎えてくれた。「朝忙しい時に来てごめんね。美羽ちゃん。」

そう断わりを言つて部屋に上げてもらつた。

「いいえ。大丈夫ですよ。今から、朝食にしようとしてたところでし
たから。」

そう言つて笑顔で朝食であるうつ、トーストとサラダを運ぼうとしていたので

「俺が運ぶよ。」

断わりをいれつつ彼女が持つ前に俺は朝食を持ち、奥の部屋に運んだ。そこにはセミロングの髪をした中学生の空ちゃんと、黒髪で長髪の幼稚園児ひなと、俺の弟分である祐太が待っていた。

「おはようございます。虎牙叔父さん。」

「おはよう。虎牙おいたん。」

「ああ。おはよう。二人とも元気そうで何よりだ。」

挨拶を交わしこの部屋の主である祐太に

「おはよう。すまないが台所借りるぞ。」

伝えたい事を簡潔に言い台所に向かつた。後ろから

「おいしいやつを頼むよ。」

と言われたが短時間で作る料理にそこまでのレパートリーがなかつたので、半熟目玉焼きを作り持つて行つた時、空ちゃんが持つていた牛乳パックが噴き出し持つていた半熟目玉焼き×4に降り注いだ。

「あつ。」「」「」「」

4人の声が重なつた。俺は無言で皆（ひな以外）の所に配り

「早くしないとひなの保育園に遅刻するぞ。急いで残さずに食べなさい。」

笑みを浮かべて言つと

「「「わかりました。」」」

ひきつった笑みを浮かべ空ちゃんと美羽ちゃんと、祐太が目玉焼きを頬張り急いで準備を始めた。

彼らの心境は

『『虎牙叔父さん。怖い。』』

『虎兄。怖すぎる。殺されるかと思った。』

そんな風に思われているとは知らずに、この後の食べ終わつたひなを保育園に送り、会社に行く・・・・・・
未婚のハズなのに三児のパパの立場を体験することになるなんて、想像してなかつたなあ。まあ、俺達5人、楽しく肩を寄せ合つて暮らすこの八畳間の生活はこんな感じで始まつたのだ。

1話（後書き）

駄文ですが楽しんでいただければ幸いです。

2話（前書き）

祐太とオリキヤラの会合前までです。

駄文ですがよろしくお願ひします。

本文をどうぞ。

話は少し戻つて4月上旬。まだこれから起こる事を知らない俺達は普通の学生と社会人として過ごしていた。

side 祐太

入学してから一週間俺は新歓コンパで知り合った仁村浩一と友達になつた。それからしばらくして、入学式以来連絡していなかつた姉さんから電話がかかってきた。近況を報告した後おもむろに姉さんが驚くべき事を口にした。

『そういうえば虎ちゃん（ひづちちゃん）がひづち側の会社に就職出来たから、挨拶に来るつて言つてたわよ。会う機会が少ないんだからから会いに来ない？それにひなに祐太の顔を覚えてもらいたいのよ。』

『えっ！虎兄^{ひづちじゆ}が帰つて来たの？！』

俺が驚くのも無理もない、何故なら【武者修業】に行つて来ると言つて三年前に音信不通になつていたからだ。俺はしばらく考えた後「わかったよ。姉さん。いつ行けば良い？」返事を返し【じゃあ。お盆になつてから来なさい。】と言われ、まだまだ先だが楽しみにしているとおもむろに

『あつ。そうそう、その日半日だけうちの子達の面倒みてくんない？』

「…………は？」何故か予想外の返事が返つてきました。

side 祐太 out

s i d e ? ? ?

「ふつ。雑魚が！」

「こちらに来て早々、絡まれ易い雰囲気からか、良く因縁をつけられる。本日十組目はヤクザみたいな人達で、20人ぐらい居たけど軽くノしてやつた。去り際にリーダー各のサングラスをかけたオッサンから【お前何者や?】と問われたので高校の時付いた通り名を告げた。

「黒き修羅」

簡潔に答えその場を去った。

s i d e 黒き修羅 o u t

彼が去つて数分後、ノビていた手下達が眼を覚ましてきた。手下の一人がリーダー各の男に向かい

「アニキ。すぐに奴を探し出しハつ裂きにしますか?」

と今後の行動を確認しに来たが、アニキと呼ばれた男は聴いている様子がなく、去つた男の方を見たまま固まっていた。アニキと呼ばれた男はただひと言手下に告げた。

「この街から逃げるぞ。」

「はあ?」

言われた事が理解できず問い合わせると

「『黒き修羅』……それで分かるだろ。」アニキが言つた意味を理解し身体の芯から震えだした。

『（黒き修羅）彼には手を出すな』これは日本中にあるヤクザたちの共通認識である。三年前一つの事務所がたつた一人に潰された。

その組全体で報復をしようとした所、男子高校生がたつた一人で乗り込んで来た。彼は籠手と刀という格好で千人のヤクザと組長を病院に送り、その地域に居たヤクザ達を追い出した。これには警察も黙つていなかつたが、その高校生の素性は一切分からなかつた。ただ一つその組の組長に言つた事が大きく取り上げられた。

『あんた達が裏でなにしようと別に邪魔はしない。だが、俺の家族に危害が及ぶ様なら容赦なくお前の家系の者、ペットや愛人、子供、関係者全てを探し出して殺す。』

これを聞いた他の地域に居たヤクザがそこに勢力を伸ばそうとした時、同じ様に組まるごと潰された。数人同じ様に來たが、全てが3日以内に潰された。これにより、日本中にいるヤクザ関係者全てが認識した。それが『（黒き修羅）彼には手を出すな』と言われる訳である。

2話（後書き）

戦闘シーンは機会があれば書いてみます。
ご意見、ご感想お待ちしております。

3話（前書き）

今回本文が短くなりました。

主人公らしき奴はでてますが本格的に出てくるのは次回からになります。

拙い文ですが気にせず読んで下さい。

では本文どうぞ

そして時が流れ、約束の日になつた。

side 祐太

あつという間に約束の日が来た。俺が姉の家を訪ね、そこで三年ぶりに虎牙兄さん（虎兄）と会うという儀式めいた日だ。ちなみに俺の夏休みはバイトとゲーム意外では消費されていない。サークルである路上観察研究会には時々行くが別に活動をしているわけでもない。サークルで織田菜香さん、佐古俊太郎先輩に会つた。

（その辺は原作を読んで下さい。）

それはともかく、日射病になるんじゃないかと思つぐらいの暑さの中、俺は一度しか来たことのない道に悪戦苦闘していた。

「うーん・・・・・」口ひきで良かつたよな・・・・・？」かすかな記憶をたよりに住宅街を走る細い路地を歩いていく。

ここは豊島区池袋。JR池袋駅の駅前はそれこそ都会らしい賑やかさだ。だがしかし、そこからほんの少し離れるだけで一気に様子が変わり、古くからの住宅街が残つてたりする。

「・・・・・・暑いな・・・・・・」

まだ午前中だというのに、足下のアスファルトからは妙な熱気ががんがん立ち上つてくる。いかにも夏らしいギラギラと照りつける太陽を見上げると、なんか恨みでも有るかのような気分だ。そんな日に、大学のある八王子の山奥から姉さんの家があるこんな都心まで出向いて来ていた。

「お、あつたあつた」

緩やかな坂を上ると田の前にはテレビドラマに登場しそうなシャレた一軒家が現れる。

「しかし・・・・・相変わらずデカいな。」

姉さんの夫の姓は『小鳥遊』。大昔からこの辺りにある家で、戦前は大地主だったらしい。だが今はそのようなことはなく、持っていた土地は一族に均等に分配され、残っているのはこの家ぐらい。と姉さんが言っていた。

深呼吸をして気持ちを落ち着かせてインター ホンを押すとすぐにスピーカーから可愛らしい声が聞こえてきた。

『はい、どちらさまですか?』

『えつと・・・あなたのお義母さんの弟の瀬川祐太です。』

『ああっ、わかりました、すぐ玄関を開けますね』

はあ・・・・・よかったです。『アナタなんか知りません』なんて言われたらどうしようかと思った。少し待つていると、トタトタと足音が聞こえてきた。

『お待たせしましたあ!』

玄関を開けて顔を出したのは、長い髪をツインテールにしたアイドルばりの美少女

『わあ、お久しぶりです。覚えてますか? あたしのこと』

side 祐太 out

祐太が美少女に会つた頃一人の男が池袋駅の駅前にたどり着いていた。男は深呼吸をして空気の匂いで帰つて来たことを実感し不適に笑つた。

3話（後書き）

美羽「質問コーナー……」
ドンドンパフパフ

空「い、いきなり始まりました、し、質問コーナー。この場は『読んでくださった皆さんの質問に答えていく』という場です。えっとキャラ崩壊もあるかもしれないのに気を付けて下さい。」

美羽「お姉ちゃん。堅いよもつとリラックスリラックス。
ひな「そうだお。気楽に気楽に。」
空「妹に諭される姉つて？」

美羽「アハハ。氣をとり治して質問に行っちゃおうか？」
ひな「うん。みかぐら みなとさんからいただいたお。ありがとうございます。虎牙おいたんは何歳ですか？ヒロインは誰ですか？」

美羽「作者の設定では23歳で、ヒロインはまだ本決まりでは無いですが一人考てるそうです。うん？何お姉ちゃん？私が言つ？どうぞどうぞ。」

空「ええっと、そ、その人はまだ出てないけど、確か私たちのし、知り合いの妄想少女だそうです。」

美羽「お姉ちゃん緊張しちゃ？」

三人「！」意見感想お待ちしております。次回もお楽しみに。」

祐太「俺の出番無し？！」

4話（前書き）

祐太と再開する前の話になります。

泣いている人がいる。泣いている子供がいる。憎たらしく笑う大人がいる。誰にも気付かれず果てる人がいる。力持つ者がむやみに牙をむき、弱者を強いる。そんな世界だから俺は・・・・・・・

side 虎牙

長い様で短かつたこの三年間、俺はアラスカ～メキシコ（ワシントン経由）を走破した。

途中いろんな場所に立ち寄り自分の見聞を広げていき、様々な人と接してきた。例えば偶然助けた少女はマフィアのボスの愛娘だったり、軍基地の近くに居たら軍人に絡まれたので返り打ちにしたり、その事が原因で逆恨みされ何度も絡んできたので、相手をするのが面倒くさくなつたのでその軍人の上司に言いつけたら、絡んでこなぐたつたとか。それはもうたくさん接してきた。

そんなこんなしていると義姉の祐理さんから連絡があり『結婚したので顔を出しなさい。』というものだった。そういえば出て行く時も何も挨拶していなかつた事を思い出し、少し自責の念に陥つたが気持ちを切り換えて戻る事を決めた。

帰国する前日お世話になつっていたマフィアのボスとその愛娘にお礼を言い、荷物をまとめた。帰国して近くの繁華街をウロウロしていると路地裏から悲鳴が聞こえてきた。周囲にいる連中は聞こえていないようにしていた。『厄介事に巻きわりたくない。』そんな保身的な雰囲気がていた。深くため息を吐くと路地に入りそこにいる人に声をかけた。

「なにしてんの？」

side 虎牙 out

side 北原栞

友達の都合が合わなくて私が一人で買い物をしていると数人のヤクザ風の男達に声をかけられた。

「そこ行く彼女。一緒にお茶しない。」

「お断りします。」

きつぱりと断わるとドスを効かせて

「調子乗んなよ！このアマ！！」

怖かった。殺されると思った。腕を掴まれ路地に引きずり込まれた。何をされるか分からぬけど、身に危険を感じて大声で助けを求めた。けど誰もこちらを見ない。『関わりたくない』そんな雰囲気をかもしだしていた。体が震える。喉が渴く。怖い怖い怖い怖いコワイコワイコワイコワイ・・・・・誰でも良い。誰か誰か私を助けて！！

「なにしてんの？」

絶妙なタイミングでその人は現れた。闇を彷彿とさせる髪、ほどよく焼けた肌、無駄の無い体格。遠目で見てカッコイイと思った。その人はゆっくりこちらにやつて来る。けどヤクザ風の男は近くにいた仲間に『殺れ』と言った。その人はナイフを取り出し、声をかけてきた男に走り出しタックルをしかけた。声をかけてきた男は近付いてきた男の手にあるナイフに気付くと、その手を蹴りその衝撃でナイフを落とした所でパンチを軽く顎の先を殴つた。ナイフを持つていた男はフラフラしたと思った瞬間後ろに吹つ飛ばされた。

「うーん。加減が難しい。」

咳きと共に私を抑えていた。リーダーらしき人が

「お前はいつたい何者だ」

声が震えていたが威厳に満ちた態度で聞いていた。声をかけてきた
彼はその態度が気に入つたのか嬉しそうに

「まだ骨のある奴がいたか。・・・・・地獄の土産に教えてやる
よ。・・・・・黒き修羅・・・・・」

その名を聞いたヤクザ風の男達は青ざめ震えだした。「今は氣分が
良い。見逃してやるから早く消えな！」

そう言われヤクザ風の男達は素早く逃げ帰った。

そんな男達の態度とは裏腹に私は彼に見入っていた。路地の隙間から
の溢れ日が彼を一層神秘的なモノに変えていった。ふと気付くと
その人は何処かに消えていた。『もう一度会えたならお礼を言わなく
ちゃ。』今更の事に気付きただ、再会を望んだ。・・・彼女の願
いは数週間後に叶う事になるのであつた。

4話（後書き）

ケンカシーンを出してみましたが、いかがでしたか？
自分の文才ではこれくらいが限界です。雰囲気が出でていないので、
またこいつのある時はちょっと過激にしてみます。（流血が多く
なるかと）

ご意見、ご感想待ってます。

プロファイル（前書き）

修正しました

プロフィール

瀬川 祐太 せがわ ゆうた

普通の大学一年生。特別取り柄もなく、友達を作るのも苦手な方。両親を亡くしており、姉に育てられた。虎牙とは幼なじみで実の兄の様に慕っている。

瀬川 虎牙 せがわ こうが

社会人一年目。母方の実家が武術家一家なので、幼い頃から鍛えられ、学生時代は『漆黒の修羅』と呼ばれていた。筋が通らない事を嫌うが、ある程度なら容認している。家族の事をバカにされる事を嫌い、そんな奴には容赦しない。祐太とは幼なじみで弟の様に可愛がっている。

小鳥遊 空 たかなし そら

中学一年生の美少女。しつかりもので妹思いの長女。思春期真っ只中で、祐太と虎牙との生活に一番悩みが深い。

小鳥遊 美羽 たかなし みう

アイドルばりの美貌を誇る10歳。女子力の高い小悪魔系。姉妹の絆は強いが、よく空をからかっている。

虎牙の事が気になっており、それが恋愛感情か、それとも別の感情なのかなからず困惑している。

小鳥遊 ひな（たかなし ひな）

3歳の保育園児で、人なつっこく可愛い女の子。祐太のことをおいたん、虎牙のことは虎牙おいたんと呼んで慕っている。

北原 茉（きたはら しおり）

小鳥遊家の向かいに住む女子高生。思いこみが強い。ヤクザ風の男達に絡まれている所を虎牙に助けられた。その後再開し惹かれ始める。

菅谷 ミキ（すがや みき）

祐太と同じ大学に通う女子大学生。丸顔で幼さの残る顔立ちでウェーブのかかった髪をしている。小鳥遊家に行く筈が迷子になつて虎牙を助けた。数日後に偶然再会。その後ちよくちよく見掛けるようになつた。再会時の出来事で虎牙に好意を抱いている。

佐原 よし子さわら よしこ

祐太と虎牙の親戚。祐太達の母親だと思つて苦言を言つ役を買って出している。

虎牙の過去についてある程度知つている人の一人。

小鳥遊 信好たかなし のぶよし

信吾の兄。性格もうりふたつで姪っ子バカ。

小鳥遊 信吾たかなし しんご

空、ひなの実父。娘バカなところがあり、行き過ぎた愛情を愛娘に注いでいる。余りにも行き過ぎな場合は祐理に叩かれてしまう。バツイチ

小鳥遊 祐理たかなし ゆうり

ひなの実母。活発で明るく楽しい人。虎牙の過去について詳しく知る唯一の人。

プロフィール（後書き）

「意見」「感想待つてます。

5話（前書き）

もう一人のヒロイン候補との出会いになります。

駄文ですが楽しんでいただければ幸いです。

side 虎牙

勘を頼りにブラブラ歩いているどどこかで見た風景が見えて来た。

「・・・・・ 池袋駅・・・・・」

何を隠そう俺は軽い方向音痴なのだ。

一度行つた場所なら迷わずに行けるが、初めての場所では100%迷つてしまふ。ふとある事に気が付いた『そいつれば家の場所を聞くの忘れてた。』帰るとは連絡をいれたが、何処に住んで居るかは聞いていなかつた。ここまで昔からの付き合いの奴に聞いて来たのだが、ここから先は全く分からぬ。今更ながらに膝をつき絶望していると。

「大丈夫ですか？」

声をかけて来る人がいた。その人はカールした髪型の可愛らしい女の子だつた。

side 虎牙 out

side 蒜谷ミキ

「大丈夫ですか？」

私は池袋に用事がありました。その用事も終わり帰ろうと池袋駅に

向かっている途中、前の方にいた黒髪の男の人がいきなり膝をつきました。何かにうち震えていました。体調が悪くなつたのかと思い、つい声をかけてしまつた。

その人は闇を彷彿とさせる黒髪、黒一色の服装、細身でしつかりとした体型、軽く日に焼けた肌、そんな姿に一瞬目を奪われボーと見入つてしまつた。

「あの、大丈夫ですか？」

話し掛けたのに逆に心配をかけてしまつた。

「は、はい。そちらこそ大丈夫ですか？」

「あつ。すみません。親戚の家に行きたいんだけど、どこにあるのか分からなくてちょっと途方に暮れてだけだから。そうだ！この辺りに住んで居るなら場所が分かるかもしれない。」

そう言ってこちらを向き微笑しながらある場所の住所を聞いてきた。なので私は分かる範囲で説明した。その人は一度言った事を忘れず、説明した通りに歩いてみると黙々と歩いて行つた。私は彼の後ろ姿が見えなくなるまで見送つていた。

side 菅谷ミキ out

side 虎牙

右往左往して漸く目的の義姉の家にたどり着いた。玄関に進もうとした時、玄関の扉が勢い良く開き中から、三人の女の子達が出てきた。三人の内金髪でツインテールの美少女が話掛けてきた。

「あのう。どちら様ですか？」

「ああ。君達の親類だよ。」

至極当然な問いに簡潔な答えで返した。彼女達は驚いた様子でこちらを見ていた。

side 虎牙 out

side 美羽

私達がスーパーに買い物をしに行こうとして玄関を開けると家の敷地に入つてくる男の人がいました。その人は『自分は親類だよ』と言つてきました。そして私達が驚いた表情を見て苦笑し『ウソじやないよ。小鳥遊美羽ちゃん。後ろにいる幼い方がひなちゃんで、となりにいるカーネーションを受けた若干オタク気味なのが空ちゃんだつたかな?』と言つてきました。私たちは再度驚いた。お姉ちゃんのオタク趣味を家族意外で認知している人はいないはずだったのにその人は知つていた。お姉ちゃんはひなと一緒に脅えている感じだつた。私は相手の人に質問しようとした時、家に電話がかかってきた。相手はお母さんで内容は『もう一人あなた達に会わせたい男の子がいるのよ。その子は私の弟分で服装は黒一色の衣服をいつも着っていて、雰囲気が暗いみたいな奴だけど面白い奴だから来たら仲良くしてあげてね。』ということだつた。この事を教えるとその人は『はあー』と深いため息を吐き、気分を切り替えたのか微笑を浮かべて

「買い物に付き合つよ。」

そう言つて、私たちと一緒に買い物に付き合つてくれた。帰り道の途中では、三人にアイスをおごってくれた。最初は驚いたけど良い人みたいで良かつたと思った。

s
i
d
e

美羽

o
u
t

5話（後書き）

もう少しで祐太との再会になります。

ご意見、ご感想お待しております。

6話（前書き）

今回短くなっています。

side 虎牙

小鳥遊家に帰つて来ると家中から叫び声が聞こえてきた。

「…………にとくと刻むがいい！父の愛の深さを…」

「何だ何だ。ヤクザでも出たか？」

「あれって間違えないね。」

叫び声を聞き、俺は検討違いで物騒な事を考えていた。しかし、この叫び声の正体を知っているのか美羽ちゃんは、大きなため息を吐き出していた。別に自分には関係無いと思い家に入ろうとしたら、目の前には靴べらを降り上げて祐太を襲っている奴がいた。しばらく傍観していると、愛する娘のため修羅と化した男（娘バカ）が獲物の靴べらを大きくふりかぶつたその時

「いい加減にしろ！このバカ亭主！」スパコーンと小気味よい音を立てて男の頭をスリッパで叩かれた。叩いたのは幼なじみの姉にして俺をここに呼んだ人物だった。

side 虎牙 out

side 祐太

さつきまでの修羅から一転、俺にとつて義兄にあたるその男性はすっかり穏やかな中年に戻っていた。どちらかといえば内向的な雰囲気の人なのだが、さつきの殺氣は本物だった。

「まったく…………信吾さんは思いこみが激しいのよ。虎牙君が相手だつたら殴られるだけじやすまれなかつたわよ。」

「…………なかなかやるな。ひなちゃん。だがこれはどうかな。」

「我が最終奥義を受けよ。オリヤツ、オリヤツ、オリヤツ、ドリヤア
ー。」

話題になつてゐる虎兄はひなと一緒に、ホームランバーみたいなコントローラーを振つてチャンバラをするゲームをしてゐる。良い勝負をしているのかひなは「機嫌だ。虎兄の連続技が決まりひなが負けると虎兄はひなに近づき

「俺の連続技使わせるなんて、ひなちゃん強いな。」
と頭を撫でながら褒めていると義兄さん（にいさん）が勢い良く立ち上がり

「キサマダレノユルシヲエテヒナニサワツ テイル。
表情を消した顔で虎兄に対し話し（威嚇）掛けた。そんな緊張の中、ひながとんでもない提案を出してきた。
「パパと虎牙おいたんで勝負して。」

そんなひなの提案に乗り、義兄さんはコントローラーを持ち、面倒くさいと言いたげに虎兄もコントローラーを構えた。

「祐太。ひなちゃんの相手をしてくれ。」

そう言って始まるのを待ちだした。虎兄が何をするのか気付いた俺はひなと一緒にその場を離れた。ゲーム内容はあまりにも一方的だつたため結果だけを記載させてもらいます。勝者・・・・・虎兄

6話（後書き）

いかがでしたか？
ご意見、ご感想待っています。

7話（前書き）

今回も短くなつてしましました。
今後からは、このくらいの量になると想いますが頑張つて続けて行く所存です。

ではでは、本文スタート

side 虎牙

一方的なゲーム（ワンサイドゲーム）を終えてすがすがしい顔で俺は祐理の姉御（通称・祐理姉）に今回帰つて来るようになつた訳を聞いた。解答は『家族を紹介したかったから』といつ俺から言えば下らない事だつた。

「…………パパだつて頑張つたんだぞ？」

「うん、ありがと」

祐理姉と話し込んでいた時に何かあつたらしく、空ちゃんがあつさりしたお礼を言つとその前から扱いが酷かつたのか娘バカが、ソファで丸くなりいじけてしまつた。

「ほらほら、信吾さんイジケないで。信吾さんが頑張つたのは私が知つてるから」

「ゆ、祐理さん…………！」泣きながら祐理姉に抱きつく娘バカ。

そんな家族団欒を見れば、祐理姉が幸せだつて事が俺と祐太によくわかつた。俺はそんな風に誰かと家族を作るとか考えたことがなく、『俺もいつの日かこんな家族が出来たら良いな』なんてガラにもなく考えていた。数分後、祐太が大事な用で帰ると言つた時俺は従姉妹にあたる三姉妹を見据えて

「じゃあ、俺も帰るか。」

そう言つとひなが俺と祐太の脚にしがみついて

「おいたん達かえちゃやー」

と、抗議してきた。祐太がひなに今度来た時に泊まることを約束していると美羽ちゃんが来て

「虎牙さんも今度來た時は泊まつていつて下さいよ」と言われたので約束し、久しぶりの日本で就活を始めることをこの時に決めた。そのあと、祐理姉から再来週から一週間くらいの海外出張でいない

から、その間の泊まり込みでの三姉妹の面倒を見る事になった。もちろんバイト代も出るので祐太も一緒に快く承諾した。

今に思えばこの時祐理姉は自分がこのあとどうなるか気付いていたよう感じた。

side 虎牙 out

10日後祐理姉達の乗った飛行機が行方不明になつた。

7話（後書き）

いかがでしたか？

虎牙と長女次女の関係は、美羽ちゃんは話が合つ友達で、空ちゃんは接し易いお兄さんという設定です。

決して一人は、ヒロインではありませんので「ア承下わー」。ご意見、ご感想待っています。

8話（前書き）

飛行機事故から一週間の虎牙の行動です。

次回が長くなるのでその前振りになります。

ではでは、本文スタート

side 虎牙

飛行機事故が起こつて一週間、俺は事実かどうか確認のため、世界中にいる俺の仲間達に連絡をいれた。

連絡をいれて2日、政府の見解が発表される前にアフリカにいるダチから『残骸が見つかつた』と連絡が入つた。一応確認のためアフリカに飛び、残骸を確認して周囲の集落に聞き込みをした。得られた情報は皆無だつた。そんなこんなしていたら、葬儀に出席できなかつた。8日ほどアフリカに滞在し情報が得られなかつたので、一時帰国した。

日本に着くとすぐに、叔母にあたる佐原よし子さんに呼び出された。叔母さん曰く『祐太と祐理姉の子供の三姉妹が一緒に暮らしているので監視もかねて祐太達に会いに行きなさい』ということだつた。祐太が今安アパートに住んでいることを知つてその日の内に終わらせたかつたのですぐに

「よう。元氣か？祐太」

祐太に電話をかけて三姉妹の今後の事について話そつと約束してアパートに向かつた。

side 虎牙 out

8話（後書き）

次回は祐太との話し合い。そしてある人達との出会いです。

お楽しみに

ご意見ご感想待っています。

9話（前書き）

遅れてしません（――）

家庭事情により更新が不定期になりますが、完結を目指して頑張りますので、応援よろしく。

ではでは、本文スタートです。

side 虎牙

祐太と話し合うため祐太が住んでいる安アパートに向かつた。アパートに近付くと空ちゃんの叫び声が聞こえてきた。

「…………ないわよ！あんなこと！」

祐太まさか空ちゃんとやんにやんしたのか！？！？中学生に欲情したのか！？！？今からでも遅くない警察と精神科に行こう。など考えていると叫び声が收まり静かになった。アパートの管理人の元に向かい挨拶を終わらせた後、祐太と三姉妹が居るであろう部屋に向かつた。賑やかな声が聞こえて来る。明るく本当に楽しそうな

9話（後書き）

「」意見「」感想待つてます。

10話（前書き）

お待たせしました。10話です

まだ定期的に更新できませんが頑張ります

ではでは、本文スタートです

祐太とよし子叔母、俺で空ちゃん達三人の今後について話し合ひつ事になつた。

side 祐太

虎兄に呼び出され待ち合せ場所に着くとすぐに虎兄を見つけた。虎兄は今最も俺が会いたくない人と一緒にいた。

side 祐太 out

side 虎牙

祐太を待ち合わせ場所で待つていると、いつの間にかよし子叔母がいた。

「よし子叔母さん！！祐太との話し合いは俺に任せてくれるんじやなかつたのか？！」

少し問い合わせる様に怒氣を込めて聞いた。叔母さんの答えは簡単だつた。祐太の覚悟を聞くことと、俺に祐太と三姉妹を任せるのとどだつた。一応納得したので軽い世間話をしていると祐太が来た。さあ祐太お前の覚悟を聞かせてもらおうか！！

side 虎牙 out

10話（後書き）

少しずつ頑張って、更新していきます
ご意見、ご感想待っています

1-1話（前書き）

遅れて申し訳ないm(—)m

後書きにお知らせ有り

ではでは、本文スタートです。

side 祐太

散々よし子叔母さんに言われた。そして一枚の手紙のような物をテープルに差し出され

「これは・・・・・・?」

「一つは、小鳥遊家の連絡先。もう一つは、私の知人が運営している児童施設の連絡先です。」

「児童・・・・・・施設」

「相談したところ、一応、義務教育の間はあの子達が一緒にいられるようにしてくださるそうです。高校からは、仕方ありませんけどね。」

そう言われ、ほんの少し心が揺れた。向かいに座る虎兄は何か考えている様で、真面目な顔で俺を見ていた。その姿に少し戸惑いながらもよし子叔母さんの話を聞き続けた。

side 祐太 out

side 虎牙

よし子叔母がいろいろと厳しいことを言った。空ちゃんと美羽ちゃんの学校での現状、二人に迷惑を掛けない様にしていた筈が、逆に氣を使わっていた事。祐太はそれを聞いて何かを感じている筈。これで何も感じない様なら今後一切手を貸さない事を決めており、この場の最善の方法も考えていた。言いたい事を散々言つてよし子叔母は立ち上がり

「虎牙君。会計お願い。じゃあ私はこの後用事が有りますから、二人で話し合いなさい。では、さようなら。」

そう言って店を出て行きました。その様子を見て一回深くため息を吐き、祐太の顔を見てまた深くため息を吐いた。絶望したような顔をしていたので新たな選択肢を出した。

「祐太。もう一つだけ選択肢をあげるから選びな。・・・元の家に祐太と俺を含めた五人全員引越しすだけだ。」

「・・・・えつ、それだけ？？！」

「ああ、これだけ。まあ俺はそこまでどうこう言いつもりは無い。さあどうする？」

案外簡単な内容だったため拍子抜けしたようだが、少し考えて頭を下げてお願いしますと頼んで来た。

祐太が了承したのを確認してある人物に電話を掛け、ひなの保護者参観日にある計画を立てた。

さあ楽しい楽しいパーティーの始まりだ。

side 虎牙 out

1-1話（後書き）

他のFFを書こうと思います。以下のいずれかで、人気が高いものを一つ書こうと思います。作品名の前にある数字を送って下さい。
〆切は11月15日23時59分までです。どうぞよろしくお願いします。

- 1 魔法少女リリカルなのはシリーズ
- 2 イレブンソウル
- 3 ブレイクブレイド
- 4 舞 HIME
- 5 I S インフィニットストラatos

以上5作品の内からお願いします。

ご意見ご感想待っています

1-2話（前書き）

本当、遅れて申し訳ない

m(—)m

家庭内問題と就活でまだ不定期になりますが、全力で更新していく
ます(^o^)

ではでは、本文スタートです

side 祐太

よし子叔母さんから散々抗議を受けた。ダメ出しどばかりに施設まで紹介された。悩んだ。吐氣がするくらい考えた。頭が真っ白になつた。けど答えは直ぐに思い描けた。姉さんや義兄さんと一緒に笑い合う彼女達が・・・

虎兄が真摯な目で、真剣に問掛けてきた。こんな目をしている虎兄には嘘はつけない。ただただ、真摯に自分の気持ちを告げた。これで何を言われても、後には引けない。

「虎兄。俺はあの子達が笑顔で居てくれるだけで頑張れる。例えそれが悲しみを先送りにする行為でも、今が一番大切だと思うから。たぶん俺一人だと立ち止まりそうになるから。俺と一緒に彼女達の笑顔を守つて下さい。お願いします。」
土下座の様に頭を下げ頼みこんだ。

side 祐太 out

1-2話（後書き）

アンケート結果

5 IS インフィニッシュストラトス

に決まりました。

この作品が一段落着いたところで初めて引っ越しであります。早めに次回の更新が出来るようガンバります。

1-3話（前書き）

遅くなつて申し訳ありません（――）

今日は一番長くなつております。

徐々に更新速度を上げられたら良いなあと想っています。

では本編スタートです。

side 虎牙

ひなの父兄参観当日

小鳥遊家の親類の方々とよし子叔母さんを密かにひなの保育園の近くにある集会施設に呼び出した。

「本日こじらにお呼びだした訳は至極簡単です。ある映像を覗いていただき、その上でまだ別々にすると言われるのであれば、彼女達は貴殿方におまかせします。・・・ですが少しでも何かを感じて頂ければ彼女達は私が引き取ります。何か異論はございませんか?」

まくしたてる様に用件を言い、反論が無いことを確認後、手中に有るボタンを躊躇なく押した。直後、変化は始まった。カーテンが閉まりスクリーンが降りてきてある映像が写し出された。そこには三人の姪っ子達のために奮闘する祐太、六畳間という狭い中で元気におき回るひなちゃん、いつも笑顔でムードメーカーの役割をしている美羽ちゃん、試行錯誤ながら料理を作る空ちゃん、そして四人の笑顔がそこにあった。

映像が終わり大半の人から『彼等と一緒に住まわせて良いだろ?』という声が聞こえるなか、小数からは『我々が引き取る』という声が上がった。小数のほとんどが中年肥りしたどこか卑しい目をした人だった。

side 虎牙 out

s i d e よし子

映像を見て私は彼等と一緒に住まわせようと大半の人は思い行動に移そうとした時、小数ではあるが反対意見が出された。その人達は卑屈な目をしている人で何かしらの裏があるように感じられた。反対をを予期していたのか虎牙君は、おもむろに、しかし威圧するかの如く語りだした。

「その人達は何故反対なんでしょうか？・・・その解答も調査しました。あまり荒事にしたくなかったのですが、仕方ないですね。・・・反対意見の方々は政治家および資本家等の週刊誌に叩かれ安い方々とお金に困っている方々に分かれます。そして・・・・・」

彼は自身の情報網を使い調べた結果を淡々と語った。それは人権を無視した活動に、反対した人の内数人が参加しているというものだつた。

s i d e よし子 o u t

s i d e 信好

私達親族は空ちゃん、美羽ちゃん、ひなちゃんの事を考え児童施設に入れる事を進めていた。だが、ある青年が、ひなの父兄参觀当日に保育園の近くにある集会施設に集められ、空ちゃん達が今住んでいる瀬川祐太という青年のアパートでの生活の様子を教えられた。無関係と思っていたが祐太君もまた、世界でたつた一人の姉を亡くしている事をこの時始めて気が付いた。姉の死を受け入れたかどうかは分からぬが、自分の事より姉の宝である姪っ子達の事を思い

遣る彼の優しさに、心打たれ『彼等と一緒に住まわせてもいいだろう』と考えていた。

しかし、親族間でも悪いウワサしかない『卓郎さん』と『雅道さん』を含めた政治家や資本家が反対意見を言い始めました。しかし、この場に我々を呼び出した青年は落ち着いた様子で淡々と語りだした。それは親族としてやつてはいけない愚行の数々であった。

side 信好 out

side 虎牙

反対意見を言っている中に『卓郎』と『雅道』を見付けると彼等が行なつた悪行を淡々と語った。二人は赤くなつたり青くなつたりとしていたが、シビレを切らしたのか『雅道』の方が怒鳴りだした。

「何を証拠に？」「証拠ならここにある！！！・・・なに！？」

数枚の写真を彼らに見せると青ざめ始めた。写真の中身は彼らが行なつた愚行の決定的瞬間だった。

「こJのような行いをする人間に、彼女達の親族を名乗る資格は無い！――」

強く断言し周囲が静まりかえった。そして射殺すかの如く睨み突けながら、だだ一言言い放つた。

「もう彼女達の前に現れるな！！！」

『卓郎』と『雅道』は俺の正体に気付いた様で、勢い良く立ち上が

ると一田散に出口に向かって行った。

side 虎牙 out

side 卓郎 & 雅道

俺達は親族を集めた男の正体に気付いた。『何故ここにヤツがいる』混乱した頭で考えても答えは出なかつた。あの殺氣は間違えなくあの『黒き修羅』だ。ヤツが居るならもう一人あの『墮天使』も近くにいる筈だ。【逃げなければ逃げ切らないと】そんな脅迫観念に襲われていると、透き通つた声に呼び止められた。

「や」行くお兄さん達。そんなに急いでドコに逝くの?」

その声を発したと思われる見た田小学生の女の子は「」笑いながらこちらに向かつて來た。その様子に睡然とする俺達。俺達は全速力で走つている。なのにその子は並走しているのに、息切れせず笑顔で話しつけていた。そして見た目の年齢とは不釣り合いの微笑みを浮かべると、おもむろに両手をこちらに向けてきた。両手にあるモノを確認すると同時に全身の血の気が引くのが感じ取れた。そこには、一丁の拳銃が握られていた。その時俺達は気が付いた。

・・・・・この子が『墮天使』なんだと・・・・・

俺達は一発ずつ頭を射たれ絶命した。

side 卓郎&雅道 out

side 堕天使

あ～あまた殺つちゃった。

私を楽しませてくれる、面白い人はドコにいるのかなあ～
アハハツアハハツアハハツ・・・・・・・・

彼女は一人呟くと渴いた笑い声でどこかに帰つて行つた。

side 堕天使 out

1-3話（後書き）

今後は後半にあつた様な残酷なシーンが増えると思います。
ご意見、ご感想お待ちしております。

14話（前書き）

書き上げたので投稿します。

では本編スタートです

No side

これは夢だと分かっている

この場が地獄だと分かっている

これは過去だと分かっている

この場で出会ったと分かっている

哀しき慟哭と場違いな笑い声

彼女は狂喜の笑みを浮かべ

彼は憎悪に身を委ねて

だがそれを相手に向ける事なく

ただ嘆く

出会った偶然

それが災厄の始まり

周囲にあるは人だったモノ

真つ赤な大地に立つは一人のみ

ただこの光景を作り出した彼女

それを睨む彼の腕の中には同じ年ぐらいの少女の死体がある

・・・もう動かない体を揺すり続ける彼は気付く

・・・もうあの笑顔は戻らない

・・・もうあの声は聞こえない

・・・もつあの暖かい場所は無い

・・・・・・もつ・・・彼女には・・・会えない

彼は只涙を流し

空に向かって吠える

No side out

side 虎牙

冷や汗を流しながら座っていたベンチから立ち上がった。

「嫌な夢だ。もう会えない奴の事をまだ思い続けるなんて、我ながら女らしいなあ。」

あの後、残ったよし子叔母さん達は祐太と空ちゃん達と一緒に住ませる事を祐太に伝えるために保育園の方に向かつた。俺はここ数週間寝る間を惜しんで情報収集していたので、さすがに疲れたので『休憩してから向かう』と告げて、近くにあったベンチに座つていた。

だが、思つていたより疲れていたのかゆつくりと船を漕いでいたようだ。ふと辺りを見渡すと、遠くの方に祐太達が抱き合い涙を流していた。作戦が上手くいったことがわかつた。

それを確認すると同時に携帯を出し、情報屋のジョンに報酬とお礼の連絡を入れながら祐太達の元に向かつて行くと、嬉しそうな声が聞こえてきた。

それを聞くだけで俺が裏で親族達を説得していた事が報われる様だつた。落ち着いた様に感じたので話し掛けた。

side 虎牙 out

side 祐太

数週間前の会合の後いろいろな事を考えた。だけど、今の自分には空ちゃん達を育てるだけの経済力はない。

彼女達と一緒に住むことは難しい。そんな事は最初から分かっていた。だけど姉さんが愛した娘達を、離れ離れにすることなんて頭の中にはなかつた。

虎兄はそんな俺の葛藤を知つてか知らずか、手を貸してくれると言つて手を差し出してくれた。

ひなの父兄参観の当日、虎兄は『用事があるから見に行つてきな』そう言つていつもより早くアパートに来て、早々に帰つてしまつた。父兄参観の途中にある昼食の時、ひな、空ちゃん、美羽ちゃん、そ

これから俺と菜花さんという大勢での参観という事もあり、大いに目立っていた。なかには物珍しそうにジロジロ見てくる親御さんもいた。

だが、そんな些細な事は気にならなかつた。
そしてひな達と話し、彼女達のパパとして抱きしめていると声をかけてくる人がいた。

「…………まつたぐ。他の「家族もおられるんですから、いい加減になさい」

「…………え？」

その人はスーツを着て、精一杯おめかしして……化粧をグシャグシャにして泣いている叔母さんだつた。

「叔母さん…………どうして」

「どうしてって、ひなさんのお遊戯を拝見しに来たに決まつていて
でしょうー。

だいたい、あなたは達学校があるはずなのに何をしているんですか
！」

怒っているんだか笑つてているんだか泣いているんだか判らない感じ
だ。

お弁当を携えているところを見ると、叔母さんもいろいろ考えてく
れていたらしい。

「それに私だけじゃありませんよ」

叔母さんの視線の先には義兄である信吾さんのお兄さんらしい小役

人の人や、数人の親戚がいた。

みんな、きてくれていたのか……

「伯父さん……」

「空……許してくれ。叔父さん達はな……」

「ううん、いいんです。」めんなさい。ワガママ言つて、「あんなさい

い

空ちゃんは、そう言いながらも俺に強くしがみつく。

「……彼が話していた事は本当の様だな。」

呟く様に言われたその言葉がやけに耳に残つたので質問してみた。

「あの……『彼が話していた事』ってどういふことですか？」
その質問に叔母さんは、保育園の外にあるある場所を見て、優しい
目をしながら言った。

「あなたのよく知る人物よ。……そう世界を敵に回しても
あなた達を守つてくれる……そんな心強い味方よ」

誰の事が解らず首を捻つているとひなが保育園の校門（？）の方を
向き、笑顔を浮かべ大声で叫んだ。

「虎牙おいたん！……！」

ひなが向いている方を見れば疲れた様子の虎兄がこちらに向かって
来ていた。

その顔は、勤めを果たしたという充実した感じと疲れきった感じもした。

虎兄が裏で何かしたのかもしれないが今はただ一言言いたい。

「「「お疲れ様！！」」

俺と空ちゃんと美羽ちゃんはそつ言いつつ虎兄の元に駆け付けた。

s i d e 祐太 o u t

14話（後書き）

「意見」、「感想」お待ちしております。

1-5話（前書き）

修正しました

本日もできたら投稿してみます

では本文スタートです

あの娘は暖かく俺を受け入れてくれた

あの場所が始まり

あの娘は優しく俺を癒してくれた

あの時が始まり

いくらでもあの娘との思い出はある

けど行き着くは悲しき終焉

side 祐太

「ただいまー！」

玄関を上ぐるなり、ひなが大きな声で叫んだ。

久しぶりに響いた元気で明るい声は、まるで明かりをつけたみたいに、広い家を一気に明るい雰囲気に変えた。

姉さん達が残してくれた家。今日からここで俺達五人の新しい生活が始まる。

side 祐太 out

side 虎牙

参観日から数日後、よし子伯母さんと信好伯父さんとともに俺を訪ねてきた。

空ちゃん、美羽ちゃん、ひなと俺と祐太が一緒に住むことに反対するのかと思い、少し殺氣立つがよし子伯母さんと信好伯父さんは微笑を浮かべていた。

「狭いアパートに五人で暮らすのはいろいろ問題も多いでしょう。まして、あの子達はこの先どんどん難しい年頃になつていきます。男のあなた達と同じ部屋で寝起きするには教育上よりしありません」

「ああ。その事なら祐太を空ちゃん達の家に引っ越しをせんつもりです。」

「あら、あなたはどうするつもりですか？」

よし子伯母さんは俺がいるモノと思い、話していくらしく少し戸惑いながら訪ねてきた。

「一応は祐太、祐太の友達達と話し合ってみて、余裕があれば近場の旅に出てみようと思つてます。」

「…………えつ……」

今後の行動を話してみたが予想外な事を言われ信好伯父さんは、一瞬ショートしたみたいだった。

よし子伯母さんはまたかとも言いたげな、ため息を漏らし少し呆

れた田でキツイ事を言った。

「…………祐理さんの事もあるから旅は辞めた方が良いわよ」

その事を聞き反論しようとした時、辛辣な事を言われた。

「それに今年で23歳なんだから結婚の事も考えて彼女を作りなさい。これは祐理さんも心配していた事なのよ。」

「ぐつ」

耳も心も痛い言葉を受け、暫くガックリとしていた。あろう事かお見合いを取り仕切ろうといつ話も上がったが、丁重に断わりをいれ挨拶もそこに別れた。

side 虎牙 out

side 信好

あの参観田の姿とは違い、面田かつた。そんな事を思つていると一緒に彼に会いに来たよし子さんは、額に浮かんだ冷や汗を拭いていた。

「何故そんなに緊張しているんだ」

事前に歳も近い事から碎けた口調で話す事を決めていたので、何時もと違う所を聞いてみた。

「…………そうですね。おかしいですよね…………ですが

仕方ないんです……彼の過去を少しだけですが知つていま
すから……」

何か哀れんだような、それでいて悲しいそうな目をしながらそう言
い、顔を伏せるが数秒後に上ると何時もの顔に戻つていた。

『彼の過去』それは今日会いに来たあの男の事だろう。

それが何故あんな悲哀の表情になつたのだろう。

少しだが彼の過去が気になつてしまつた。

side 信好 out

数日後俺と祐太は、小鳥遊家に引っ越す事になつた。

そこからまた新たに始まる新生活に期待を膨らませ、今はただここ
にいる祐太、空ちゃん、美羽ちゃん、ひなを守るために頑張ろうと氣
合を入れ直すのだった。

1-5話（後書き）

「意見」「感想お待ちしております

次回もお楽しみに

1-6話（前書き）

少し短いですができました

朧との再開直前という感じのつもりです

では本文スタートです

side 祐太

家族にも、秘密はある

それは、いいことなんだ。たぶん
一緒に暮らすからこそ、必要なことかもしれない
とはいえ……あんまり驚かさないでくれると、ありがたいな

side 祐太 out

side 虎牙

「…………ちゃダメー！」

早朝から池袋の端っこにある閑静な住宅街に女の子の声が響き渡つた。

住人の大半が、大昔からこの辺りに住んでいる人が、比較的裕福な人のどちらかであり、池袋という繁華街の外れにありながら意外なほど静かで治安もいい。

時刻は早朝。恐らく、悲鳴の様な叫びは隣近所にもしつかり聞こえた事だろう。

『大方開かずの間になつてている祐理姉さんの部屋にでも見ていたんだろう。』と勝手に決めつけ、手を止めていた今日から行く職場の用意と朝食を再開し始めた。

「虎牙さんはどんな仕事をしてるんです？」

朝食が出来上がり食卓に持つて行くと椅子に座っていた美羽ちゃんが聞いてきた。『まあアパートにいた時は帰つて来たら何時もいたから不思議に思つていたのだろう』と勝手に解釈して当たり障りの無い事を答えた。

「学校の清掃員さ。」

「…………その仕事つづきつくれないですか？」

この家で一番年上のため氣を使つているのか、少し不安げな表情で聞いてきた。優しい子何だと改めて思い頭を撫でながら余裕の笑みを浮かべて答える。

「きついもんか。皆の幸せの為に仕事をしているんだ。だから心配しなさんな。…………それに清掃員の方が給料高かつたし、アイツとの約束も守れるしな」

最後の方は聞こえない様に話した。その後早く職場に行かなければならなかつたので、準備もそこそこに家を出た。

side 虎牙 out

side 美羽

虎牙さんの仕事が気になり聞いてみると『清掃員』という答えだつた。答えた時の虎牙さんは何か悲しい事があつたかの様に沈んだ表

情をしていた。消えてしまいそうな感じがして大丈夫か聞いてみたが、無理矢理笑つた様な顔で頭を撫でながら『大丈夫だよ』と言つていました。しかし、話の最後の方に『それに清掃員の方が給料高かつたし、アイツとの約束も守れるしな』なんて呟いていました。本当に大丈夫なのは分かりました。けどそれは私達と友達との約束の範囲で言つている事になんとなくですが、気付いてしました。

side 美羽 out

side 虎牙

職場である会社に着き、始めに自己紹介をした後担当の高校に向かつた。以前にも同じ様な仕事をしていいたので、作業事態は早くできた。研修期間を省略して勤める事になった。

side 虎牙 out

side 北原栞

今日は全校集会があり、先生の長いだけの話を聞いていた。友達とヒソヒソ話をしている内に話が終わり、『新たに一人の清掃員を雇つた』という事で清掃員の方が紹介された。その人は、いつかチンピラから守つてくれた人だった。

side 北原栞 out

16話（後書き）

呼び方について書いてなかつたので書いておきます

小鳥遊 空

祐太・・・お兄ちゃん

虎牙・・・虎牙さん

小鳥遊 美羽

祐太・・・おじさん

虎牙・・・虎牙さん

小鳥遊 ひな

祐太・・・おいたん

虎牙・・・虎牙おいたん

といつ感じかな

「意見」「感想」「指摘等もお待ちしております

1-7 話（前書き）

やればできました

最近、本当に調子が良ことです

この調子で行けるアコモド行つてみます

では本文スタートです

17話

彼女は歌う

人々に希望を与えるために

彼女は笑う

人々に笑顔を与えるために

彼女は叫ぶ

人々を導くために

彼女は人々を救済し、より良い未来へ導く

だが彼女の前には試練の山が連なっている

彼女は諦める事なく突き進む

その先には絶望の未来しか無いのに

彼女はただ進み続ける事しか思っていなかつた

「あ、あのー！」

side 北原栞

私は全校集会の後急いで、『黒き修羅』と呼ばれていたあの人に会いに行きました。

清掃員室の前で会えたので声をかけました。『もしかしたら忘れているかもしれない』とも考えましたが、そんな事些細な事を気にせずただ再開できた事が嬉しくて、そんな行動をとってしまった。

side 北原栄 out

side 虎牙

清掃員室の前で呼び止められた。その人は帰国した時ヤクザに絡まれていた女の子がいた。

「久しぶり。あの後、大丈夫だった？」

一応は片付けたが、あの後どうなったか知らずにいたので確認をした。

「・・・もうあの時の様なヤクザは会っていません。・・・あ、あの、あの時はありがとうございました。」

彼女は恥ずかしいのか、少し頬を赤らめながらお礼を述べた。

『あの娘の様に可愛らしい美少女だ』と思ったが、それは『あの娘にも田の前にいる彼女にも失礼だ』と思い直した。

side 虎牙 out

side 北原栞

お礼を述べると彼は懐かしそうなそれでいて悲しげな顔をして私を見ていきました。

・・・いいえ、何か違いました。その何かはこの時はわかりませんでした。

後になつて私は『彼が、私越しに誰かを見ているんだ』と気がきました。

side 北原栞 out

side 虎牙

5時に仕事が終わり、帰宅している途中で祐太と美羽ちゃんから『ひなを迎えに行つて欲しい』と連絡があり、ちょうど保育園の近くだったので『了解』と返信し足早にひなが待つ保育園に向かった。保育園に到着すると門の所にいた保育士さんが話掛けてきた。

「あら？今日は虎牙さんをお迎えなんですか？」

一応彼女達の保護者という事で各学校の先生には挨拶は済ました。その中で一番友好的だったのが、彼女『仲里雪』だった。歳も近いせいかいろいろと話し掛け来てくれる。

「ひなちゃん。虎牙おいたんが迎えに来てくれましたよ～」

そう言つている方からタトタトと走る音が聞こえてくると、次に起

「ひなであります事に身構えた。

「虎牙おいた～ん！～」

そう呼ばれたかと思うと真横から勢い良くひなが抱きついてきた。ひなをしっかりと受け止めると少しだけ注意した。

「ひな。跳び掛るのは別に構わないが、もう少し場所を考えような。

」

「うん！～わかった！～」

そう言いつつ頭を撫でると一ヶコリと花が咲いた様な笑顔を向けて頷いてくれた。

その光景を近くで見ていた『仲里雪』は『この人はやっぱリタダ者じゃない』と思つた。

「では、今日もお世話になりました。」

「雪先生！～わよひな～！」

そつ言つてひなと手を繋いで家に帰りました。

side 虎牙 out

おじさんにはひなのお迎えをお願いしようと連絡すると、何か学校の

side 美羽

単位（？）がヤバイみたいでそれどころじゃないらしく、帰宅途中であろう虎牙さんに連絡しました。返事はただ簡潔に『了解』の一言だけ、今日仕事があつたのならその事の感想何かを入れても良いのになんて思いつつ、夕食の準備を進めた。三十分ぐらいたつた時、玄関が開く音がした。

「「ただいま」」

案の定虎牙さんとひなが帰ってきた。今日の夕食当番は虎牙さんだつたのを今更ながら思い出し、リビングに入つて来た虎牙さんに向けて謝つた。

「・・・ふう。 そつか、なら今日はもう仕方ないから今度からは確認しちきなよ。」

そう言って微笑みながらひなの相手をしていた。
その姿が何故か愛しくておとうさんとダブつて見えた。

s i d e 美羽 o u t

s i d e 虎牙

祐太が大学で留年の危機を迎えていることを知りあるやつに連絡を入れた。

s i d e 虎牙 o u t

side 佐古俊太郎

私はいろいろな人脈を持つて大学生活を大いに楽しんでいた。特に後輩の瀬川祐太君が入部してからは花が咲いたかの様な華々しさがある。

そんな事を考えていると携帯電話からいきなりターミー タの電話の着信音が流れ出した。この着信音を登録している人を思い出し急いで出ると（この間2秒）脅され（・・・）ながらではあるがある事を頼まれた（・・・）。

それは自分の方でも考えていた事なので、了承した。

・・・まさか祐太君が彼の知り合いだったとは・・・

会話を終えると、そんな風に思っていた。

side 佐古俊太郎 out

17話（後書き）

今回は『仲里雪』という人物を出しました

一応ヒロインではありませんが準々ヒロイン位の立ち位置です

虎牙の良き友達といった感じです

容姿等はいつか新たにプロフィールを作り出します
(その他の出演した人物も一緒に)

ご意見、ご感想、ご指摘等お待ちしております

1-8話（前書き）

寒くて手が冷たくなつて辛い季節になりました

コタツに入つてこると、小学生の時はミカンの食べ過ぎで足が黄色くなつていたなあ。などと考へてしまします

では本文スタートです

明るく活気ある町

一人の少年が訪れる

少年は傷付いていた

ボロボロのココロとカラダ

身に付けた衣類は「コロとカラダのようにボロボロ

不審な彼を町の住人は歓迎しました

傷を直し去ろうとする彼に住人達は言いました

『君は傷付くのは恐くないのか』

彼が去ろうとした先は、長い道のりで途中に盗賊のネグラがあつた
のだ

彼は不適にだが悲しげに呟く

『一宿一飯の恩はその身で返せというのが家訓でね。だから、町を
脅かす盗賊のネグラを潰すって位はしないとな』

そして振り返り

『じゃあな。生きていたらまた会おう』

そつ舌ざると振り向ともせず歩き去った

side 茉

夏のはじめ頃までは賑やかな音に満ちていた向かいの家は、ある日を境に一変してしまった。

雨戸を閉ざし、笑い声ひとつ聞こえてこなくなつた。聞いたところによると、「家族に不幸があつたという。それほど深いご近所付き合いがあつたわけではないが、それでもあの幸せそうな家族の姿を見られないかと思うと、なんとも切ない気持ちになつた。が、つい先日、あの家にまた賑やかな音が戻ってきた。

不幸があつたところのは自分の聞き間違いで、長い旅行にでも行っていたのだろう。

そう思つて密かに安堵していたが、あの愛らしい三姉妹と一緒にいたのは、優しそうな父親でもなく、明るくはつらつとした若い母親でもなく、見るからに軽薄で頼りなさげな若い男だった。

真相を、突き止めてやる。可憐な野獸の牙から守るために。

そう誓う私は昨日見たTVドラマのヒロインのみで勇敢な気持ちになつていた。

side 茉 out

side 虎牙

就職初日が終わる時ある事に気付いた。それは重要なため早めに終わらせるために、近くにあるスーパーで蕎麦を20個ほど買い占

め、隣近所向こうの軒に引つ越しの「」挨拶と今後からよろしくお願ひしますということを伝えた。

『円滑なご近所付き合いができるないと、祐太達と暮らしてゐる内に困った時の相談ができない』という考え方で行動した。

三年間の旅行で培つた経験が、生かされたと思つ出来事でした。

side 虎牙 out

side 祐太

留年の危機がある事を佐古俊太郎（クソブタ野郎）に諭される。学園祭が近いので強制的に連行される。まあ、この辺りまではいい。だが、学園祭まであと二週間しかなかつたり、何をするか何も決まっていないのはいただけない。それも

「会長が忘れてた」

という事だから呆れ返つてしまつ。そして何より許せないのは今日は帰れそうにないことだ。

side 祐太 out

side 空

今日は虎牙さんと一緒にカレーを作る日で、お兄ちゃんが何時もよ

り早く帰つてくる日もある。私が制服の上からHプロンを着ようとすると先に帰つて来て、私服姿でバンダナを巻いた虎牙さんに注意を受けました。

「……空ちゃん。制服が汚れるから着替えて来なさい。」

「けど、お兄ちゃんが早く帰つてくるから」「着替えて来なさい。」

「シ」

繰り返し言われた時、有無を言わせない口調で言われしぶしぶでありましたが、私服に着替えてきました。リビングに戻つた時電話が鳴っていた。この時間帯に電話して来るのはお兄ちゃんしか考えられなかつた。私が急いで出ると予想通りにお兄ちゃんからの電話だつた。

「はい、小鳥遊です！」

『もしもし……空ちゃん？』

「お兄ちゃん？あのね、今虎牙さんと一緒に夕飯のカレーを七『』めん！」

「え……」

『実は、学園祭の打ち合わせで今日はもう帰れそうもないんだ』

「そ、そつ、なんだ……」

『本当にじめん。悪いけど、夕飯は四人で食べて。』

「…………うん。わかった。お兄ちゃんも頑張ってね。こっち
は大丈夫だから！」

無理矢理元気を振り絞り、そう言ひて受話器を置いた。

「電話の相手は祐太か？」

虎牙さんが聞いてきた。

「はい・・・・・」

私の表情と態度からある程度わかつたのか

「・・・それじゃあ、アイツを唸らせる程のメシを作りつか？」

お兄ちゃんが驚いた顔が見たくて私はすぐに頷いた。

side 空 out

side 虎牙

今日の仕事も終わり、ひなと一緒に夕飯の食材を買って帰った。割り当てられた部屋で私服に着替え、バンダナを巻いてリビングに行くと空ちゃんが制服の上からエプロンを着ようとしていた。注意を一度程するとすぐに着替えに部屋に戻つたみたいだ。

空ちゃんが部屋に戻つている間に夕飯を準備していると電話が掛ってきた。

電話は祐太からで『今日はもう帰れそうもない』といふことだった。

落ち込んでいた空ちゃんを祐太を驚かせようとして誘った。返事に頷いてくれた。

side 虎牙 out

1-8話（後書き）

「Jの調子で十日以外は更新していきたいと思います
「J意見」「J感想」「J指摘等お待ちしております

19話（前書き）

更新しました

一日で構成を練るのは難しいですねえ、

毎日更新されている方の努力（？）が少しですが分かってきたつもりです

今週も出来るだけ平日は更新していきます

そう言えばいつの間にか10000PVを越えていました

記念に何か書くべきなのでしょうか

何かしてほしいシーンがあれば感想欄に送つて下さい

では、本文スタートです

風は吹く

何時もと変わらず

雨は降る

何時ものように

太陽は昇る

希望の象徴のように

五感を刺激する全ては

何時もと変わらず

ただ

隣に居るべき人は

消えてしまった。

私とひなは虎牙さんとおじさんの帰りをリビングで待っていた。何時もの時間になつても虎牙さんは帰つてこない。どうしたのかと心配し始めていると突然電話が鳴り始めた。

「はいーもしもし、小鳥遊です。」

『その声は美羽ちゃんか?』

「どうしたんですか?虎牙さん」

虎牙さんからの電話に驚きながら私は何故か無性に嬉しい気がした。
『「うん……今日から数日帰れそうにないから俺抜きで食事をしてもうつても良いかな?もちろん、食事は作りに戻るから安心してくださいよ。』

「…………やうなんですか……早く帰つて来てくださいね。」

『ああ。本当にすまない。夕飯はコンロの上にある鍋に作つてあるから、レンジかコンロで暖めて食べててくれ。……早めに帰れるよう頑張るから……』

虎牙さんがいない事に不安を覚えてしまうが、私達のために走り回つている姿が目に浮かんだ。その姿が微笑ましく思え、頑張ろうといつ気持ちになつた。

「ハアー」

ため息を吐き、田の前にいる筋肉達磨に

「おい、変態達磨。俺の今日これから予定を変更させてでもお願
いしたんだ、もし下らない事だつたらビルの屋上から逆さまに吊す
からな。」

少々殺氣の籠つた田で問掛ける。

「」の始末は俊ちゃんにしてよお。私はただ『虎牙あなたを呼んで来い』
つていう俊ちゃんの命令を聞いただけだからあ

言い訳にそんな事を言われ『久々に漬しとくか。』なんて考えてい
る、バーのドアが開き祐太とイケメンと生け贅が入ってきた。生
け贅を見付けると立ち上がり極々自然に近付くと、『アーヴィング
を掛けそのまま頭丁部から地面に叩き衝けた。のたうち回っている
生け贅に足で蹴り起こしながら、祐太と一緒に入ってきたイケメン
に挨拶した。

「こんばんは。あなたが『村造一さんか? 祐太とこの『ゴミから聞い
て』いる。なんでも料理が上手で世渡りも上手いとか。・・・まあ付
き合ひが長くなるかもしねないが、よろしく。」

「ああ、」
「ああ、」

微笑しながら、握手を交わしていくと、踏んでいたゴミが

「あ、あのお話をうなだれ以下。話があるならまあ、する」とがあるだらうが。」つ、じめんなさいですサー」

侮辱を込めた目で話を折るとびびったよひに、冷や汗を流しながら謝罪してきた。

「今日は、初対面の人が居るためこのくらいで済ませたが、今度同じ様な事をしたら生き地獄を見せて殺る。わかつたか？」

「サーわかりましたサー」

顔は青ざめ、冷や汗の量が凄い事になつてゐる。「もう一度念を押した。

その後、祐太がなにか言いたそつた風にしていたので話し掛けた事にした。

side 虎牙 out

19話（後書き）

「意見」「感想」「指摘等お待ちしております

20話（前書き）

更新しました

毎日頑張って構成を考えていますが、頭がパンクしそうですね
ですが、今年中に二巻～四巻位まで書き上げたいです

では本文スタートです

暗く冷たい世界

そこが俺の原点

暖かく明るい世界

それが彼女の原点

たくさんの方達との出会いと別れ

繰り返される現実

終りなき欲望は人を

幸福な未来へ導くかそれとも災厄の破滅へと誘うか

side 祐太

佐古先輩に連れられて行った場所に虎兄がいた。虎兄は佐古先輩にゴブランイストをした後、頭丁部から地面に落とした。優しいから忘れかけるが、この人は熊くらいは簡単に倒せる人なのだ。
佐古先輩をある程度絞めてすつきりした顔でいる虎兄に

「虎兄はこの『クズのことが?』うん。知り合いだつたんだ。」

「ああ・・・人間のダメな部分の集合体がこのクズだ・・・・。ただ、変に人間関係を作るのが上手いから情報屋とかするばいいんだが・・・・。あんな変態行動がなくなればクズから人として扱つてやるだがなあ。」

虎兄はあまり人を褒めたりしないのだが、褒めるという行為だけでも驚きに値する。『本当に佐古先輩にはお世話になりっぱなしになあ』なんて事を考えていると『ヒロミちゃん』と呼ばれた筋骨竜々の化け物が

「誰が、腕の筋肉が子供の胴体程ある化け物ですつてえ!...!」

「うわあ!..!来るな!..!寄るな!..!妖怪筋肉達磨!..!..!」

心に思つていた事をズバリと当てられ内心動搖してしまつたが、動搖が知られればいじられる事は目に見えている。そんな事を考えていると虎兄が帰る用意をしていた。

「虎兄。そういう仕事は「もう終わつている・・・・それに二人も居るんだ俺が居なくとも問題無いと判断したので帰宅準備をしていてるだけだ」・・・・ですよね」

虎兄だけ先に帰る事になり、少し不満が有るが元々虎兄が家事の全般を任せているので口出ししそう。そんな俺の葛藤に気が付いたのか、虎兄は昔からするように頭に手を置き、幼子に言い聞かせるように話だした。

「お前の成長を促すためなら俺は敢えて悪役になろう。だから、今

は大学生活を楽しめ。・・・・・俺には無縁の世界で自分を貫いてみろ・・・祐太」

最後の方は聞き取れなかつた。だが、仁村やヒロミちゃん・佐古先輩は聞こえていたらしく微笑んでいた。

side 祐太 out

side 虎牙

あの後ニヤニヤして話し掛けるクズが気に入らなかつたので、縛り上げ天井から吊して帰つた。予定より早く帰宅するとキッチンの方から何やら焦臭い匂いがした。火事かと思い慌てて靴を脱ぐと、すぐく机上に駆け込んだ。

そこで目にしたのはクロコゲの何かの前で慌てている空ちゃんと美羽ちゃんがいた。

二人は俺に気付くと顔を青ざめ冷や汗を流し始めた。時刻は21時15分まだ起きていても問題ない時間だ。『なぜそんなにビクついているのだろう?』などと考えていた。

「・・・・・どうしてそんなにビクついているのか知らないが、俺は君達がケガをしない程度なら赦すから安心しなよ。・・・・・ただまあ、人の道に反する行為なら怒るけど、今回は俺や祐太のためになんだから許すよ。」

「「」めんなさい。・・・・・おやすみなさい。」

一人は俺に謝罪すると寝る前だったのかすぐに部屋に戻つて行きま

した。

side

虎牙

out

20話（後書き）

次回は美羽、空視点でお送りします

「意見」「感想」「指摘等お待ちしております

して欲しいショーチューション等ありましたら感想欄等に送つて下さい

21話（前書き）

遅れてもうしわけない

予告通り空と美羽sieの話になります

皆さん風邪引かないように気を付けて下さい

では本文スタートです

side 美羽

虎牙さんが今夜は遅くなると連絡をいれてから数分してお姉ちゃんが帰ってきた。

知らないうちに気持ちが落ち込んで暗い顔になつていていたようでお姉ちゃんに心配を掛けてしまった。

「なんでもないよお姉ちゃん。・・・・・ せうだ今田は虎林ちゃん
遅くなりそつだからって連絡があつたよ。」

納得といった感じで頷きだした。

「あれっ？ ジヤあ夕飯はどうなるの？」

虎牙さんの心配より夕飯の心配をしているお姉ちゃんにイラッとしたが、不意になんでイラッとしたんだろうと不思議に思つた。

Side 美羽 out

side 空

家に帰ると暗い顔をした美羽がリビングにいた。

何故暗い顔になつてゐるか自分でも分からなかつた様子で、虎牙さんが夜遅く帰つてくる事を話した。

最近は虎牙さんが作つた夕飯を五人で食べていたのに、その内一人もいなのは何か寂しい気持ちになつた。

暫くして夕飯の時間になつたので三人分をコンロで温め治し食べました。

食事も入浴を済ませて寛いでいると電話が掛つてきました。電話に出た美羽は本当に嬉しそうに笑みを浮かべていました。

side 空 out

side 美羽

寛いでいると電話が掛つてきました。相手は虎牙さんで予定より早く終わつたので帰宅するからという連絡でした。何故だか嬉しくて笑みを浮かべているとお姉ちゃんが

「虎牙さんが帰つてくるつて聞いて嬉しそうだね。・・・美羽は、虎牙さんの事好きなの?」

「・・・・・たぶん違つと思つ」

自分の気持ちが何なのか判らないが、今はただ『近くにいて欲しい』と思うだけ・・・・・

「そんな事言つてゐけどお姉ちゃん方こそおじさんと虎牙さんどう

らが好きなの？」

少しからかつた復讐をかねて聞いてみた。お姉ちゃんは恥ずかしかったのか、顔を赤らめて伏してしまいました。
からかうのもここまでにしようとしました時

「わ、私は一人とも好きよ。」

そう言われ私は頭が真っ白になつた。

side 美羽 out

side 空

美羽がからかい気味にお兄ちゃんと虎牙さんのどちらが好きかなんて聞いてきた。二人とも優しいし心強い所があつたりするので、好きになるのは仕方ない。

「わ、私は一人とも好きよ。」

と思い切つて言ってみた。

すると、美羽が突然アウアウ言い出した。どうも頭が真っ白になつたみたいだ。

落ち着かせるために戸棚にあつたコップに水を汲んできた。美羽が飲み終わつたコップを見るとそれは美羽がいつも使つてているコップではなく、虎牙さんがいつも使つてているコップだつた。その事に気付いたらしく今度は顔を真っ赤にして、失神していた。

side 美羽&空

そんなこんなしているうちに夜も更けてきた。

そろそろ虎牙さんが帰つてくる時間になつてきたので、夕飯を暖めようとした。ですが、夕飯から暖めていたようでクロコゲになつてしました。

そんな時虎牙さんが帰つて來た。

怒られると思つた。

だけど、虎牙さんは微笑し話しあした。

「どうしてそんなにビクついているのか知らないけど、俺は君達がケガしない程度ならある程度なら赦すから安心しなよ・・・・・・ただ、人の道に反する行為なら怒るけど今回は俺と祐太のためにし tànだるい?・・・それなら怒れないよ。」

その言葉と虎牙さんの悲しげな瞳を見たとき不覚にもときめいてしまつた。今は彼を直視出来そうになかったので

「「「めんなさい。・・・・・おやすみなさい。」」

と言つて赤くなつた頬を隠すように自分の部屋に戻つた。

side 美羽&空 out

21話（後書き）

「」意見」「感想」「指摘等ありましたらいまじめに送つて下せ
お待ちしております

22話（前書き）

遅れました

今年も残りあとわずかになりました
風邪などひかずに今年を越したいと思います

今日は祐太のバイト内容が中心です

短いですが本文スタートです

暗い路地で悲鳴が響く

金髪の少女に群がる男達

絶望した田で遠くを見る少女

あらがう事を止め神へと祈る

だが祈りは通じない

この世界には神なんていないんだ

そんな絶望の淵で諦めていた少女の前に流れ者が現れた

黒一色の服装の青年に一涙の可能性を掛け、助けてと叫ぶ

青年はこちらを見て現状を確認し、一度だけ額くと少女を組み伏していた男を、蹴り飛ばし周囲にいた男達数人を昏倒させていった。数分後、周囲を囮んでいた男達の半數程を一人で倒した時、残つていた男達は一斉に逃げ出した。

青年は少女の方を向き、微笑むと去つて行つた

八王子の朝は寒い。もともと山の斜面に広がっているキャンパスなので、吹き下ろす風を防ぐような高い建物もなく、オマケに一日の内で最も気温の低いこの時間だ。まだ十月だというのに、空気が身を切るようになつた。何故そんなことを思つてるかとアメフト部キャプテン花村先輩と一緒に、大量のパンを詰め込んだケースを次から次へと搬入するというバイトをしているからだ

「花村先輩！－マジで寒いつす・・・・・・」

「がんばれ瀬川！・・・・・あと5ケースだ！」

「が、頑張ります」

このバイト、早朝五時から始まるので想像していたよりもはるかにキツイ。寒くて手がかじかむし、なにより配達箇所が多いので一分一秒の作業の遅れが命取りになるというシビアだ。

聞いた話では雪の降る日にこのバイトを体験したアメフト部の現役クオーターバックが終わつた時には『一度とやりたくない』と漏らしたとか。そんな状況からすれば、今日なんかはまだマシな方だ。各大学の購買、スーパーなどを花村先輩の運転するトラックで巡り、最後にやつてきたのが我が母校。運び入れたパンの代わりに、空になつたケースを回収したら本日の作業は終了だ。

「瀬川よ、今日は助かつた」

「いえ。虎兄曰く『困つている人がいれば助けよ。・・・・・普通は恩を仇で返すようなヤツはない』・・・なんて事を言つてたのを思い出したからその通りにしだけです。・・・・・それより、バイト代こんなに貰つていいくんですか？」

「気にするな！　ハハハ！」

俺の背中をバンバン叩いて豪快に笑う花村先輩を見て、『虎兄に少し近付けたかな』なんて考えていた。

s i d e 祐太 o u t

s i d e ? ? ?

成田国際空港に一人の少女とその親（？）が日本の地に足を着けた。

「長かったわね。ジョンソン彼はドコにイルのかしら？」

「お嬢様。彼の現住所は確認しております。焦らずともすぐにお会いできるかと」

その光景はどう見ても、お嬢様と執事に他ならなかつた。執事が告げた事で何かを思い出したのか、うつとりした目でトリップしてしまつた。・・・・・口元からヨダレが垂れかけても少女の可愛らしさは、失う事がない程だつた。二人は周囲に気付いたのかイソイソとその場を離れるのだった。

s i d e ? ? ? o u t

22話（後書き）

最後に出て来た少女の目的とは
やつくりと判つていくと思ひます

「意見」「感想」「指摘等ありましたらどうぞ送つてください

お待ちしております

23話（前書き）

今年最後の更新になります

では早速本文スタートです

だあーー！

遠くで叫ぶ声が聞こえる

全員いますぐ逃げろおーーー！

蜘蛛の子を散らすように逃げ惑つ人々

おいーーあんた聞いているのかーー？

そんな中話し掛ける人もいた

・・・・・・・・・・だがしかし俺は田の前にある光景が信じられない
かつた

そこにはたくさん的人が折り重なるようにして積み上がっていた
老若男女関わらず積み重なつていた

その中には生者はおらずただ血まみれで　　に穴の空いた体の各部
が損失していた

その屍の中に見つけた・・・・・・見つけてしまった

自分が愛したただ一人の女性を

だがその体には無数の切傷がそして彼女の胸には　　が空いていた

視界がぐるぐる回る

吐氣がする

アハハハハハ・・・

そんな地獄の中に笑い声が聞こえた

いつのまにか周囲に火が付き屍と生者を焼き殺し始めた

ドコまでも楽しそうなその声と業火が人を焼く音を聞きながら俺は意識を手放すのだった

その声の主がこの光景を造り出した事を後に知ることになる

side 虎牙

またあの夢を見た。地獄の中で笑い続ける少女。返り血で赤く染まつた服で両手には拳銃とショットガン。腰には50センチのサバイバルナイフ。そうアイツが俺から平和な日常を奪つていったんだ。憎悪に駆られていると部屋のドアが開き美羽ちゃんが入ってきた。

「・・・おはようございまーす。虎牙さん。朝ご・・・・・大丈夫ですか!?」

安心させるために体を起^{いた}すとするとが何故か力が入りずベッドに倒れて気を失つてしまつた。

side 虎牙 out

side 美羽

今日は休日、いつもなら朝早くから虎牙さんが朝食を作つてゐる。けどなぜか今日に限つておじさんは早朝からバイト、虎牙さんはまだ起きてきていない。

お昼近くになりさすがにおかしいと思い虎牙さんの部屋に行きました。

ノックしても返事がなかつたので『ごめんなさい』心の中で謝りながらドアを開けベッドの方を見た。そこには顔色が悪い虎牙さんがいた。

「・・・おはよひざわいまーす。虎牙さん。朝・・・・・・大丈夫ですか!?

反射的に挨拶を交しましたが、すぐにベッドに伏してしまつた事に気付きました。

なにか病気なのかと思い急いで駆け寄つて額を触る。熱があるようで熱くなつていた。

その後病院に行く事になりました。軽い風邪で一日安静にして寝れば治るとの事でした。

帰宅してからおじさんに連絡を入れると『早く歸つてくる』といつ事になりました。

昼食は私とお姉ちゃんとシチューとお粥を作り、おじさんは昼過ぎ

に帰つてくるため昼食はいらない。虎牙さんは風邪を私達にうつさないよう部屋で昼食をとる事になり、初めての三人での食事になりました。

side 美羽 out

side 祐太

家に帰宅すると何か焦げる匂いがキッチンからした。
空ちゃん達の身に何かあつたのではないかと思い、急いで靴を脱ぐとキッチンに駆け込んだ。そこにはお粥を丸焦げにした美羽ちゃんと空ちゃんがいた。

・・・その後事情を聞くと『虎兄を少しでも早く元気になつて貰いたくて創作のお粥を食べさせよう』という事になり、作つていると最後に入れる隠し味を何にするかで口論になり、ふと気付くとお粥が真っ黒になつっていた。』といふことだった。

side 祐太 out

side 虎牙

ふと目が覚めた。常人では気付かない匂いがした。それは何かが焦げる匂い。

記憶の底に封じ込めた光景が目の前に浮き上がってきた。
その光景の一端を見た瞬間

絶叫を上げ意識を失つた。

side 虎牙 out

23話（後書き）

次回は虎牙の狂乱になります

では来年もよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0827x/>

パパのいうことを聞きなさい！IFストーリー

2011年12月31日23時45分発行